

## 第一百五十六 鼠色の布巾

此時中川は廣海子爵を顧み「世中に不釣合な事も澤山ありますが生活費と臺所の付近ほど今の日本人に不釣合な物も寡い様です、譬へば九尺二間の長屋に住んで月に十圓の生活をする者も晒木綿の布巾二三枚を使つて居ます、此方の様に二百圓三百圓の生活をなさるお家でも晒木綿の布巾が五枚か十枚ある計りと申すのは随分不釣合な話して長屋の布巾も鼠色、此方の布巾も鼠色では何ふも権衡が取れない様です、西洋風の臺所では勝手道具買入費の中に布巾の代價が一大項目を占めて居ますし、毎月の支拂に布巾洗濯費が生活費相應に多いものです、食器を清潔にする布巾ですから最も注意しなければなりません、玉江さん、私が此方のお臺所に相應した事をお教へ申しませう、早速唐物屋で中位な西洋手拭即ちタワルを三十枚程お買はせなすつて毎日三枚づ、使つて毎日洗濯おさせなさい、爾うすれば何時でも清潔な布巾が得られます、然し布巾計り清潔でも食器の洗ひ方が昔し風だと忽ち布巾が汚れますよ」玉江「オヤ洗ひ方に昔し風と今風と違ひますか」中川「違ひますとも、肉食しない天保時代と肉食をする今日とは同じ方法を用ひられませんが、モシ女中さん、失禮ですが今お洗ひなすつた西洋皿が其處にあります子、ちよいとお見せなさい、玉江さん、是れは牛肉でも召上つたお皿だと見えます」玉江「左様です」中川「ちよいと見た處では綺麗になつて居る様ですけどもコラ御覽なさい、指で撫で廻して見ると指の先へ薄黒い脂が付きます、西洋の臺所では妻君が皿だの鍋の中だのを指で撫で、黒い脂が着くと黙つて女中の頬へ塗り付けるそうです、斯う云ふ皿を布巾で拭くと直ぐ布巾が鼠色になります、是れは全く冷水か或は微温度で洗つたために脂が凝結するので、肉類を盛つたお皿は熱湯へ石鹼を溶せて其中で洗はなければなりません、その方が却て早く洗へます、先づ洗ひ桶へグラ／＼沸立つた湯を注いでアルボース石鹼の様な殺虫石鹼の一片を入れて溶かして其中へ皿小鉢を澤山入れます、湯が熱いから手では洗へません、棒の先へ木綿の布片を括り付けてお皿の表と裏をグル／＼と熱湯の中で撫でると直ぐに綺麗になります、磨砂で擦る世話も何も要りません、洗つ

た皿を指の先で一つ／＼引出して乾いたタオルで拭くと一度で綺麗になります、是れが西洋風の洗ひ方で、石鹼の無い時には糠で洗つて落ちます、スープ鍋やソース鍋も熱湯と石鹼で洗はなければなりません」と一々委しく教ゆるに玉江嬢感心し「成程子、爾う被仰いますと今迄無駄な骨計り折つて居りました、家庭料理を習ふ時には臺所の仕事も覺なければなりません子、戸棚の中も是れからは毎日掃除致させませうがそれにも何か好い工風が御座いますか」中川「別に名工風もありませんけれども食物の戸棚を掃除する時は必ず隅々へ鹽を振り撒いてそれを掃き寄せるのが法です、第一に塵が鹽へくるまつて舞ひ上りませんから器物の上へ落ちる憂が無し、第二に有毒細菌が居ても鹽で殺されますから安心です、昔しから鹽で清めると云ふのは自然と殺虫の功を現はしたので鹽は臺所の必要物です、庖丁で手を研つても直ぐに鹽を塗つて一時の痛みを耐えて置けば決して化膿む様な事はありません」玉江「オヤ爾うで御座いますか、序に伺つて置き度いのは硝子壺を洗ふ時何うしましたら中が綺麗になりますか」と質問も亦た盡くる事無し、

## 第一百五十七 下女讀本

中川「硝子壺の中を洗ふのはジャガ芋を小さく截つて鹽と共に壺の中へ入れて水を少し加へて其壺をよく揺ぶつて居ると綺麗になるのです、ジャガ芋の無い時は玉子の殻を小さく毀してそれを入れてよく振つても宜う御座います」玉江嬢「それは好い事を伺ひました、ナイフやフ・クが直きに色が變つて不可ません、と云つて一々研がせるのも面倒ですが何う致したら宜う御座いますか」中川「西洋食品屋にナイフを磨く粉がありますあれを買つて置いてコロツプで磨いてもコロツプが無ければジャガ芋の切口へ其粉をつけて磨いても直きに綺麗になります」玉江嬢「爾うで御座いますか、少しも存じませんでした、硝子の器が不潔になると線や孔へ黒いものがついて何うしても落ちませんが何か綺麗にする法は御座いませんか」中川「硝子の器を綺麗にするのは薬屋からアルコールを買つて来て西洋楊枝へつけて線の中や引込んだ處を擦ると綺麗になります、アルコールの無い時は炭酸曹達をお湯で溶

かしてそれで洗つても宜う御座います、窓や障子の硝子を拭くのも其通り、最初布片へアルコールか曹達の溶かしたものをつけてそれでよく磨いて其次に新聞紙でよく拭取つてモー一度よく乾いた柔い大きな布巾で拭かないと綺麗になりません、西洋人の家では一日置きか少くとも三日目位に窓硝子を拭かせます、大きなホテルや會堂では硝子拭きと云ふ専門の商賣人を雇つて拭かせます、決して硝子を曇らせて置く事はありません、日本風の座敷にも近頃腰硝子を箆めて居る障子は澤山ありますけれどもよく拭き込んである硝子は滅多にありません、何うかすると一月に一度も拭かない様な家があります、硝子を曇らせて置いては硝子を簸た甲斐がありません、火鉢を毎日つや布巾で拭く程なら窓硝子も一日置き位に拭いて宜い譯です、床の間の板がピカ／＼拭き込んであつても硝子が曇つて居ては釣合が取れません、爾う云ふ事はまだ日本人が硝子の使用に馴れないからでよく牛乳の沸立つたのをコップへ注いでコップを刮る人がある様なものです」玉江嬢「ソレ／＼其事を伺ひ度いと思つて居ました、熱湯を注いで割れないコップでも牛乳の沸立つたのを注ぐとよく割れますが何う云ふ譯で御座いますか」中川「牛乳は質が緻密ですから熱度を多く保ちます、牛乳を硝子の器へ注ぐなら少し冷まして置かなければなりません」玉江嬢「成程子、伺つて見れば解りますが今迄はよくそれで失敗りました、珫瑯製のお鍋は何で洗ふと綺麗になりますか」中川「それは玉子の殻を崩して擦するのに限ります」玉江嬢「鐵鍋へ何かこびり付て落さない様な時は」中川「先づ石油を布片へつけて氣長に擦つてその後石鹼湯でよくお洗ひなさい」玉江嬢「色々な法があるものです子、三や和女達も解らない事を伺つてお置き、何に調法するか知れないよ」と下女を顧みて質問の催促、中川は辛抱が出来ず「アハ、復た此次に致しませう、爾う云ふ事を女中さん達に覚えさせ度ければ私の著述した下女讀本をお讀ませなさい、文明の家庭に應用すべき臺所の仕事が委しく書いてあります、イヤ御主人、大層臺所見物が長くなりました、今度は何處でも拝見致しますせう」と此方より促せども主人は最早自慢の鼻折れたり「モー迂つかりとはお目にかかれませんが」

## 第一百五十八 臺所の模範

主人公の廣海子爵は中川の臺所論に大打撃を受けて復た家の内を案内すべき勇氣無し「中川さん、貴君に伺つて初めて氣が付いたのは慚愧の次第ですが全く此の家では臺所へ一番金を掛けませんでした、臺所なんぞは附屬物の様に心得て成るべく安上りにさせましたが今のお話して大きに發明します、成程臺所は家屋の中心點であるから充分に金をかけなければならん、爾う思ふと片時も此儘にして置けない氣がします、早速大工を呼んで臺所だけを建て直しませうが、それに就ては何か好い御考案がありますか、最も便利で最も衛生的の臺所を建てるには何う云ふ風にしたものでせう」と今は中川の力を借らねばならず、中川も我が説の行はれんとするを悦び「其の御奮發は何より結構です」貴老は折中主義がお嫌ひだと被仰いましたけれども西洋風の料理をなさるには何うしても西洋風のストーブも無ければならず、日本風の飯も炊くからお金や竈もなければなりません、その双方の料理に適當した臺所は一の研究問題で、今上流社會に臺所の模範と稱せられて居るのは大隈伯家の臺所です、先年新築の際に伯爵が最も苦心經營せられたのが臺所の建築法で今でも伯は來客のある毎に自から案内して臺所を見せられる位です、勿論あの大きな家屋のお臺所ですから規模は大きくてコック部屋が五坪板の間と叩きが二十坪合せて二十五坪即ち五十畳敷ありますが、屋根に硝子張りの大きな明り取りがあつて臺所全體の明るい事と申したら塵一つ隅に落ちて居ても直ぐ見えます、だから自然と清潔を保たなければなりません、全體の構造が極く便利に極く衛生的に出來て居ます、そこで瓦斯ストーブの大きなのが一つ、飯を炊く瓦斯竈が六つ備へてあつて平日は大概六十人前の食事、園遊會でもあると何百人前の料理でも、其中で自由に出来る様になつて居ます、石炭や炭薪の代りに何でも瓦斯を使ふ仕組ですから烟が出て燻ぶる憂は無し、石炭や薪を運ぶ手数も無し、鍋の裏へ煤が附いて洗ふと云ふ世話も無し、急いで火を起すと云ふ世話も無し、火が要る時は一つネチをひねる計りで強くも弱くも自在な火が出來て何時間でも平均な熱度を與へられますから瓦斯竈になつて以來一度も飯の出來損じが無いそつです、それで時間も早く出來ます、一升の飯が一・三分、二升が十五分、三升が十八分と時間が一定して居てじは／＼時に蓋取るなど叱られる世話ありません、ストーブの方も其通り西洋料理でも

日本料理でも火力が一定して居るから一度火加減さへ覚えれば早く出来て失敗がありません、ソレお客が大急ぎでお料理を拵へると云ふ様な時に瓦斯ストーブだと何んなに樂だか知れないそうです、それで費用は何うかと云ふのに以前石炭や薪の時代に臺所だけ一日一圓五十一錢掛つたのが瓦斯になつて九十五錢で済む、即ち一日に五十六錢の徳があります、費用も寡くつて清潔で便利で人の手間も餘程省けます、瓦斯の熱と云ふ文明の道具が出来た以上は炭や薪を使つては居られませんが、大勢の家でも其通り經濟であり、小勢の家でも小さな瓦斯竈とストーブさへ置けば無駄な火を起さずに入要だけづゝ火力を用ゆるから却て小勢の家の方が徳用になりませう、左れば大隈伯家の臺所に倣つて外の華族方三軒計りが今は臺所の改築最中です、新に此の臺所を改築遊ばすなら大隈伯家のお臺所を手本として規模を小さくすつたら如何でせう」と今の世に大切なるは臺所の改築法案なり、

## 第一百五十九 文明の器

臺所の事に注意せざるは我が生命を重んぜざるに齊し、廣海子爵初めて夢の覺めたる如く「中川さん、最初に貴君が臺所の攻撃をされた時は餘り突飛な極端論だと思ひましたが大隈伯家の事を伺つて見ると生命を重んじ健康を重んずる人は誰でも臺所に事に注意しなければなりません、大隈伯爵が自ら來客を臺處へ案内せられると伺つて我輩は慚愧に堪えません、何となれば我輩は今迄殆ど臺所へ足を入れた事が無い、臺所の様な不潔な所へ一家の主人が出て行くのは土君子の為さゝる事だと言はれた考へを持つて居ました、我輩計りでは無い、子爵とか伯爵とか言はれる人は大概臺所へ出る事を宵しとしなかつたでせう、其の癖毎日その臺所から出来るものを食べて居るのです、我輩も早速大隈伯家の臺所に倣つて瓦斯ストーブの臺所を建築させませう」と此勢にて押し行かば上流社會の臺所は漸く其面目を一新せん、中川も我が説の容れらるゝを悦び「全體我邦の人は臺所の事を輕蔑するから惡いので、臺所の事は人の最も重んずべきものです、殊に一家の主婦となる人が自ら臺所を顧みないと云ふ様な事は甚だ悪い習慣で、何十人の奉公人を使つて居ても主人夫婦が自ら臺所の事を支配しなければな

りません、紐育の上等ホテルでは泊り客を臺所へ案内して私の所では斯う云ふ風な衛生的の組織で食物を調製すると自慢を言ふさうです、客に取つては心持の好い自慢でありませんか、我邦でも京都や大阪の昔し風の家では客が臺所を通り抜けて座敷へ行く様に出來て居ますがあれも必ず客に對する禮を知つて居る人の考案でせう」子爵「アハ、それはチト不確だが昔の人でも臺所に注意した者はありません、今迄の臺所は寫を公開すれば自然と清潔を保たなければなりません、今迄の臺所は寫眞の暗室に似たのです、然し中川さん、東京の人は瓦斯を利用する事が出来るけれども地方にはまだ瓦斯の供給が無い、爾う云ふ處は不便です」中川「左様です、地方では下総の成田に小規模の瓦斯がある計りで大阪すらまだ摺つた揉んだと云つて出來ません、石炭瓦斯を利用するのは都會で無いと不便ですけれども地方の豪華なぞでは小規模のオイル瓦斯を使ふと便利です、千圓計りの器械を買つて石油から瓦斯を製して瓦斯溜即ちタンクへ蓄積すれば入要だけ出して使へて極く調法です、是れからは地方にオイル瓦斯が流行するかも知れません、一件で餘れば二三軒で連合して使つても便利です、何にしろ我邦の人がズン／＼文明の利器を使用する様にならなければ不可ません、失禮ながら貴老の家のお臺所は天保度以來更に進化しない構造で明治の天地に新しく出來たものと思はれません」子爵「イヤハヤ一言も無い、そこで中川さん、今度は茶室へ御案内する積りでしたがモ一怖くなりましたから庭へでも出ませう」と一同を誘ひて庭に立出で「中川さん、向ふに見えるのが茶室です、貴君の觀察眼から御覽になつたら茶室の事に就いて何とか御議論がお有りでせう、是れも後學の爲めに一つ伺ひ度ひもので」中川「大に有ります」

## 第一百六十 小兒の室

中川は如何なる事に向つても我が意見を立てざる無し「御主人のお尋ねですから私も遠慮無く申上ますが、決して茶室其の者を悪いとは申しません、生活に必要な部分が整頓した上は茶室でも何でも好きなものを建て、構ひませんけれども毎日使ふ臺所に金を掛ないで滅多に使はない贅澤物たる茶室の方へ餘計金をかけてある様では少々釣合が取れないと存じます、それに臺所の次にまだ必要な場所が家の内にあ

ります、即ち小兒の教育室で、お見受申せばまだ小さいお子共衆もありなさる様ですがお子供一人に幾人の手がかゝります」子爵「左様乳（女へんに保という漢字）母に抱（女へんに保という漢字）母に子守と三人が附けてあります」中川「その三人が附いて居てもソレ縁側へ這ひ出したから危い、ソレ火鉢の角へ倒れてはならんと毎日危険の豫防計りして居なければなりません、是れが西洋風に廣い一室の中を轉けても驅出しても危くない様にして角のある様な物を置かないで子供のために必要な道具計り備へて戸の錠をピンと卸せる様になつて居たら乳母一人で十分監督が出来ます、三人で追駆け廻すよりも安全で子供の為にも遊び場があつて樂です、然し子供が大きくなると一室に籠るのが嫌になつて兎角親達の室へ行き度がるし、お客があると客座敷へ出しやばつてお菓子をねだる様な弊がありますから西洋では小さい部屋でも棟を別に建てるそうです、小兒の家は少し離して置いて無闇に本家へ來ない様にしてあります、丁度我邦の風流人が棟を別にして茶室や亭を造る様なものです、茶室や亭と小兒の家とは孰れが一家に必要でせうが、小兒の家がある上に茶室や亭があるのは構ひませんが、小兒教育法等閑にして主人一人が茶室の自慢計りする様では私の主張する風流亡國論を擔ぎ出さなければなりません、其の外に日本風の家屋では雨の降つた時に運動する場所がありません、此事は大學のベルツ氏も大層八釜しく言つて日本の様な雨の多い國で雨中の運動場が無ければ誰も毎日一定の運動をする事が出来ない、一定の運動が出来ないのに毎日同じ分量の食物を喫するから忽ち胃腸を悪くすると斯ういふ順序になります、運動した日に澤山食べて胃袋を大きくすると其翌日は運動せんでも同じ位食べられます、然し運動せん日は腹の口から體中へ吸収されないで徒らに胃腸を勞する計りだから遂に病氣の原因となるので運動の不足と云ふよりも寧ろ運動の不平均と云ふ事が身體に悪いのです、それも畢竟家屋の構造が悪いからで、私は日本風の家屋に臺所の不潔と小兒の室の無いのと雨中の運動場の無いのは三大缺點だと思ひます、其の外の小缺點を挙げればまだ澤山ありますけれども此の三點だけは一日も早く改良させ度いと思ひます」子爵「成程子、爾う伺つて見ると家屋全體を改築しなければなりません、そこで庭を一つ御覽下さい、庭の池が少し自慢なので」と未だ自ら誇る所あり、成程池の水清冽にして錦鱗其中に游泳す、都門の中に

斯る清けき池あるは珍らしし、